

“日本人の心” について

2019-8-21 玉木悠二

先達て北九州大分県の国東半島に行ってきた。

神仏習合化の思想が深く広範に浸透していったこの地の歴史や、残された多くの摩崖仏、石像が語る六郷満山に、30年振りに思いを寄せたからである。

3日間をかけて歩いた。面白かった・・と言うか、兼ねて我々に与えられている課題「日本人の心」に何等かの示唆を与えるのではないかと思ったりもした時、体の中に純朴で穏やかな空気が漂ってくるのを感じた。

特に平安の昔、宇佐神宮の僧までもが造像に携わったという長安寺に収蔵のミズラ姿の木造太郎天像は、不動明王の靈験を持つ大日如来の化身とされ、神が仏に仕える世界、即ち「仏教優位の世界」を容認する神仏習合思想の終着点を示すものかとさえ思われた。

また、この様な認識の中で育まれた国東の石仏や石像は、どれも畿内で見慣れた端正な修羅や仏の姿とは全く違う世界におわす仏であった。

厳めしく装う畿内の仏達の顔や仕草は、その姿とは裏腹にその前に立つ者に、そこはかたない暖かみを伝えてくるのであるが、この地におわす仏達の姿は皆、何か“ゆるい”のである。

これらの仏を彫った仏師の心情の違いによるものかも知れない。

懸命に彫り上げた仏師が鑿を置いた時、埃だらけの顔に浮かべたであろう微笑みや、額に滲んだ汗の跡が見えてくるような風景である。

これは出羽三山における殺伐とした歴史、明治に入ってから神道国粹主義者の宮司西川某が廃仏毀釈の名のもとに徹底的に既存の伽藍、文物を破却した心とは決定的に様相を異にするのである。



長安寺の太郎天像

1. 日本人であることの証明書探し

大体、日本人などと定義できる人格？は、あるんだろうかと思う。

・・訝りながらも、迷っていても仕方がないので、古い証拠を探るのも一つの方策かと思いついて掛かってみた。

と言っても手っ取り早く我らに出来るのは、我々が古来より受け継いできた物語や古事記等なので、まずはそれらを出来るだけ儘丹念に集め、それを総括して日本人が何たるかをデッサンしてみることにした。

但しデッサンの結論が間違っているか否かは問題外とする・・なぜなら真実は誰も知らない？のだから。

以下は先ず古いと思われる証拠を思い出すままに記した資料である。

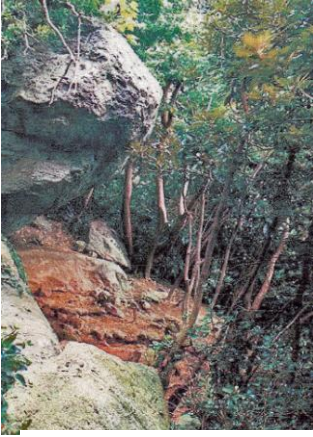
(1) 沖ノ島

沖ノ島には4世紀後半から約500年間にわたりヤマト王権が国家的な祭祀として執り行った遺跡がある。

全裸になって禊をし、小生が島に足を踏み入れたのは、今から実に30年も前の話である。

この島は今「海の正倉院」と呼ばれ、今迄に出土した8万余点の遺物は、全て国宝に指定されている。

当初は沖ノ島だけで行われていた古代祭祀は、やがて本土に近い大島や本土でも行われるようになり、後には本土に宗像三女神を祀る拠点として宗像大社が成立した。



沖の島 半岩陰祭祀

ただその昔はどうであったか、それが分かれば我らが宿題である日本人の根源的心根、心映えが分かるのではなからうかと思うがサテ。

何が正解かは分からぬが、我らが先祖はここで只管に祈った。

神が降って来ると見初めた大きな磐の上や、時代が下ると磐の麓に、捧げものを並べて祈ったご先祖様の心は一点の曇りもない純粋な心、願いであったろうと思う・間違いなくそうであったと信ずる。

そしてそこでは「一木一草たりとも持ち出しを禁ず」とか「不言様(おいわずさま)」とかの禁忌が厳しく守られてきたからこそ、遺構や遺物が千年以上の長きにわたって地表に露出されたままの状態に残されたのであろう。

それは仏教的要素や神仏習合の影響を全く受けずに日本人が信じ続けた原始の自然崇拜思想の世界であり、それが「日本人の心」の原点に対する認識であろうと思うのだが、どうであろうか。

(2)比婆山・吾妻山 そして船通山

その昔、広島県の中国山地の中ほどにある比婆山という山に登った。

この山塊の最高峰は立烏帽子山と言い、ブナ林に覆われた山頂にはイザナミノミコトの御陵と伝える苔むした巨石があって、明治の頃までは地元の人達による勧進相撲の大会があった等とも聞いている。

山全体が神域とされ、麓には里宮が置かれて山頂の奥宮まで参道が続いていた。

イザナミの墓所は他にも数か所あるようだが、宮内省は今もこの地を最有力として指定していると聞く。



イザナミの命の御陵

「ヨモツヒラザカ」

外で待つようにとイザナミが言った約束を違えて墓の奥まで踏み込んでイザナギが見たものは、ウジ虫にまみれ腐れ爛れて、鬼共に囲まれたイザナミの遺体であった。

それを見たイザナギは驚き戦いて必死に逃げ出し、そのあとを鬼共が追いかける・



黄泉の国への入口

「古事記」によれば、やっと墓から逃げ出したイザナキは、黄泉国に通じる墓の入口を大きな石で塞いでしまうが、この時後を追ってきたイザナミが、イザナギが塞いだ岩の向こう側で涙ながらに訴えたのは

イザナミ：「この上は、あなたの国から1日千人の人をこちらに取り込みましょう。」

イザナキ：「あなたがそうするなら、わたしは1日に千五百の産屋を建てることにしよう。」

それ以来、人は1日に千人が死に、千五百人が生まれることになったのだという。

その舞台となった「伊賦夜坂」は、今の揖夜神社付近(島根県松江

市東出雲町揖屋)とされている。

なお比婆山というのは1970年に未確認動物であるヒバゴンの目撃騒動で騒がれた場所として有名である。

「船通山」

序に船通山の話・風土記には「須佐之男命、志羅伎の国より…此峯にいたり座す、今里俗船通山といふ」とある。

小生が登ったのは40年程も前の話か。

中腹にはヤマタノオロチが住んでいたという「鳥上ノ滝」という滝があり、流れ下った先は斐伊川の源流となる。

高天原から地上に降りたスサノオが斐伊川のほとりを歩いていると、箸が流れて来るのを見つけ上流には人が住んでいるに違いないと思ひながら進んでいくと若くて美しい娘を挟んだ老夫婦が泣いていた。

スサノオが事情を聞くと「毎年恐ろしい大蛇がやって来て、うちの娘をさらって行く。最後に残ったのがこの娘、今度はこの娘が…。」

その話を聞いたスサノオはチャッカリ、その「クシナダヒメ」を嫁にすることに同意させ、大蛇退治に出掛けた。



シヨボイ鳥上の滝

「オロチ退治」

大蛇の様子を聞くと

「一つの胴に八つの頭、尾があって、目はホオズキのように真っ赤、体には杉や檜が生え、

大きさは八つの谷と丘にまたがるほど、腹のあたりには血が滲んでいる」

そのような話を聞いてスサノオはすぐさま老夫婦に強い酒を造らせ、家の周りには八つの門を設けた垣根を廻らせて、そこに造った酒を入れた桶を置かせ、クシナダヒメに危害が及ばないように”佐久佐女の森(奥の院)の大杉を中心に『八重垣』を造り、ヒメは櫛に変身させて自らの髪にさして大蛇が現れるのを待った。

しかしそこに現れた大蛇は酒の匂いに大興奮、桶の酒を全部飲み干して酔い潰れてしまったので、スサノオは「ここぞ」とばかり切り刻んで、最後は矢を撃ち込んで退治してしまった。

「天叢雲剣」と「八重垣神社」

大蛇の体を切り刻んだ時に出てきたのが天叢雲剣、後に天照大神に献上されて三種の神器、草薙剣となった。

愛する姫を救うために命がけで大蛇と対峙したスサノオは、クシナダを「櫛」に変え、髪に差して戦ったが、この時の「櫛」には、その言葉が持つ「霊妙なこと、不思議なこと」を意味する「奇(く)し」「霊(く)しび」の語源が含まれていて、姫に対するスサノオの深い思いがその中に込められているとも見做されている。

ヤマタノオロチを退治したスサノオはその後、佐草の地に『八重垣の宮』を造り、

「八雲立つ 出雲八重垣 妻込めに 八重垣造る その八重垣を」

という日本初の和歌を詠んだ。

この森には、姫が八重垣に隠れている間の飲料や、姿見用に使う「鏡の池」も作られている。

(3) 出雲大社と大国主大神

日本国の始まりである出雲大社や大国主を巡る話は余にも有名なので適当に端折るが、それも中途半端に

なるので以下に少々。

「国づくり」

大国主はスサノオが少彦名と共に築き上げた国を天照大神に譲ることにしたので、天照大神は大いに喜んで次の様に言った。

“これから先、目に見える世界は私の子孫が守ることとするので、
あなたは目に見えない世界を司り、そこに働く「むすび」の靈力を以て
人々の幸福を導かれよ“

“その代りに、あなたの住居は「天日隅宮(あめのひすみのみや)」として、
私の住居と同様、柱は高く太い木、床は分厚く広大な板で築かれよ“

その結果大国主は目に見えない世界を司り、高天原の諸神は天照大神の命で大国主のために宇迦山の麓に壮大な宮殿を造営することになった。

そして大国主は、スサノオからその愛娘であるスセリビメとの結婚と、出雲の国の国造りの継承を許され、少彦名と協力して出雲国の国づくりを立派に完成させていった。

「天界から出雲の国への使者」

天照大神は天上界から、豊かに育った出雲国を見ていてその国がどうしても欲しくなり、天穗日命(アメノホヒノミコト)を使者として出雲国に遣わして国譲りを迫せませた。

しかしこの神様は大国主の素晴らしさに心服し、三年経っても天上には何の報告もしなかったもので、天若日子(アメノワカヒコ)を次の使者に仕立てて遣わしたが、この神もまた大国主の娘である下照比賣(シタテルヒメ)と結婚し出雲国の王になろうとして八年経っても報告をよこさなかった。

いよいよ痺れを切らしたアマテラスが最後に遣わしたのが力自慢の建御雷神(タケミカヅチ)と天鳥船神(アメノトリフネ)で、2人の神は稲佐の浜に大きな十拳剣(ツツカノツルギ)を逆さに立てその剣先に胡坐をかいて座り大国主に国譲りを迫った。

しかし大国主は「自分一人では決められないので、息子二人に聞いてくれ」と応えたので、タケミカヅチとアメノトリフネは、先ず魚釣りが好きで美保関で漁をしていた一人目の息子事代主神(コトシロヌシ)のところへ行って国譲りを迫ると、コトシロヌシは国譲りの話を受け入れ乗ってきた船を逆さまにして柏手を打ち、青柴垣に変えてその中に隠れてしまった。

次に向かったのが二人目の息子で力自慢の建御名方神(タケミナカタ)、タケミカヅチはタケミナカタに出雲国をかけた力比べを挑むが、勝負はあつげなくタケミカヅチが勝ち、タケミナカタは諏訪の地まで逃げて最後は降伏し、その地を出ないことを条件に許されて今は諏訪神社で祀られることになった。

「出雲大社の成り立ちと縁結びの由縁」

これにより大国主は国譲りを決心するのだが、その時に条件として次の二つを求めた。

超デッカイ宮殿を建てること → **出雲大社の創建**

目に見える「現世」は天照大神が、見えない「幽世」は大国主 **が治めること**

なお幽世とは目に見える現世を映した世界で、現実の世の幸福は幽世からの思頼(みたまふゆ)により与えられるとされる。

このことから人と人とを結ぶ、目には見えない縁や人の運命も大国主が治めるところとなり、「縁結び」も大国主が司ることとなった。

「因幡の白兔」

隠岐国から因幡国へ渡りたくて仕方がない兔が、「そうだワニ(鮫)の背中を渡って行こう!」と思いついた。

そこでワニ達に「兔とワニでは、どっちが多いかなあ?」、それを聞いたワニ達は「そりゃあ我々の方が多いよ」と答える。「じゃあ僕が数を数えるから、因幡国まで一列で並んでちょ」と兔。

海に出来たワニの道を、数を数えながらピョンピョンと渡ってゆき愈々因幡国に渡り切ろうとする時「シメシメ、これで向こう岸に渡ることが出来た」と言ったのでワニが怒った。兔はワニ達に皮を剥がれてまる裸にされてしまった。

そこを通りかかったのが大国主の兄弟たち、その兔を見て「これはこれは可愛そうに、体を海水で洗って風に当たっていれば治るよ」と教えたが、そんな治療で治る筈もない、どんどん痛くなる。そこを通りかかったのが大国主で、大国主は「体を真水で洗い、蒲の穂綿に包んでいけば治るよ」と優しく教えた。言われた通りにすると兔はすぐに元の兔の姿に回復した。

と言うのが表向きの話なのだが、その裏には大国主と兄弟神達の因幡の姫神「八上比売命(ヤガミヒメ)」に対する求婚話が絡んでいたのである。

「兄弟神の大国主への迫害」

兄弟神達が因幡国を訪れた時、荷物持ちとして大国主を連れて行ったが、その時大国主のところに前に助けられた兔が現れて、「ヤガミヒメは心優しい貴方を選ばれるでしょう」と囁き、ヤガミヒメはその通り大国主と結ばれることになった。

ヤガミヒメと大国主が結ばれたことを知った兄弟神は怒りと嫉妬にかられ、因幡からの帰途「この山には赤い大猪がおる。わしらが追い落すので、お前は下でそれを捕まえろ!」と大国主に言い渡した。

言われた大国主が山麓で待っていると、赤い大きな物が転がり出て来たので、大国主が「猪だ!」と抱き捕まえてみると、それは兄弟神が山上で真っ赤に焼いた大岩だったので大国主は大火傷を負い、とうとう死んでしまった。

「母神に助けられる大国主」

これを知った母神は天上の「神産巢日之命(カミムスビ)」に願って、赤貝の「蚶貝比売(キサガイ)」と蛤の「蛤貝比売(ウムギ)」を遣わして治療をさせると大国主はすぐに回復して元気になった。

これを見た兄弟神は直ぐに次の策を考え、大国主を騙して山中深くに誘い出し大きな木で挟み殺そうとしたが、この時も母神により救われたが先々のことを心配した母神は紀伊国の「大家毘古之神(オオヤビコ)」の元へ大国主を逃がすことにした。しかし兄弟神はそれでも紀伊国まで追いかけてくる。

それを見かねた母神は大国主をスサノオがいる「根の堅州国(ねのかたすくに)」に逃がすことにした。

「試練に耐える大国主」

根の国に渡った大国主は、そこでスサノオの娘神であるスセリビメと恋に落ちるのだが、スサノオは大国主がどうしても気に入らない。それで大国主に様々な試練を課していく。

最初に課した試練は「蛇が沢山いる寝屋で寝る」こと。

この時大国主の身を案じたスセリビメが「蛇に襲われたら、これを三回振りなさい」と呪力のある布を渡したので大国主は危うく難を逃れることが出来たが、それを見たスサノオは「百足と蜂で一杯の寝屋」で寝よと次の難題を与えるが、これもスセリビメの助けで何とか難を逃れることが出来た。

次々と試練に耐える大国主を見たスサノオは、今度は広い野原に矢を放って「あの矢を拾ってこい」と命じ、大国主がそれを拾いに野に入るや直ぐにその野に火を放った。

迫って来る炎に大国主は一時は死を覚悟するが、ネズミが教えてくれた地下の空洞に逃げ込んで炎をやり過ごし、更にそのネズミはスサノオが放った矢まで探し出して持ってきてくれた。

一方この様な事情を知らないスセリビメは、大国主はもう死んでしまったと思い込み、泣きながら葬儀の準備をしていると、大国主が手に矢を携えて帰ってきたので大いに喜ぶが、しかしスサノオはそれでも試練の手を納めない。

「駆け落ちをする大国主」

次にスサノオは大国主を自分の寝屋に呼んで「頭のシラミ取り」を命ずるが、スサノオの頭はシラミではなくムカデが充満していた。

そこでまたスセリビメがムクの実と赤土を大国主に渡し、大国主はそれを口に含んでは吐き出す所作を繰り返したので、それを見たスサノオはそれをムカデを口に含んで噛み潰しているものと勘違いして感心し、すっかり心を許してそのまま寝入ってしまった。

眠りこけるスサノオを見た大国主は「この時」とばかりスサノオの長い髪をあちこちの柱に括り付けた上、大岩で部屋の入口を塞ぎスセリビメを背負い、手にはスサノオの宝物である太刀、弓矢、琴を持って逃げ出した。

ところが「やれやれ」と安心をしたその時、手にしていた琴が傍らの木の枝に触れて、大きな音を響かせたので、その音を聞いたスサノオは慌てて飛び起きたが柱に結びつけられた髪が邪魔ですぐには追いかけられず、その間に大国主はどんどん逃げていった。

髪を解いて追いかけたスサノオは地上との境まで追いかけると、大国主に向かって

「お前が奪った太刀と弓矢で兄弟神を追い払い、
スセリビメと結婚し大きな宮殿を建てて住処にしろ！」

と呼びかけた。

スサノオはついに試練に打ち勝った大国主を娘婿とし、この国の大王になることを認め、大国主はこれによりスセリビメを正妻として出雲の国造りを取り進めていった。

琴引山は大国主が弾いた琴が眠るという言い伝えのある島根県飯南町に位置する山、山頂付近には『琴弾山神社』があり、中腹には大神岩が鎮座する。



琴引山 琴の岩屋

「ヤガミヒメのこと」

これは大国が根の国に至って最初に結ばれたヤガミヒメの話である。

上の様な事情を知る由もなく、大国主の子を身ごもったヤガミヒメは臨月が近付いた頃、大国主に会うために出雲の国を訪ねた。

長く険しい旅の道中、宍道湖を船で渡る時、山あいには湯気が立ち昇るのを見つけた姫は、そこに温泉があることを知って、その湯に体を浸し長旅の疲れを癒したと伝え、それが今に“日本三美人の湯”の一つ、湯の川温泉となっている。

しかし出雲の国で知った悲しい事実に、ヤガミヒメは嫉妬深い性格のセリビメを恐れて、泣く泣く大国主を諦めて因幡国へ帰っていったという。

帰りの道中で出産した姫は、その御子神を木の俣にかけて去っていったと伝えるが、それにしても何とも…愛する旦那を諦め、最愛の我が子を手放し、身も心も疲れ果てた姫が何とも哀れではある。



湯の川温泉 ヤガミヒメの像

(4)元伊勢神宮・皇大神社

京都福知山市の一画にある皇大神社は、元伊勢三社のうちの一神社の奥宮に位置付けられている。

所在地の岩戸山は古代より信仰され、神が降臨した所として禁足地とされ、頂上付近には岩の祭祀跡があるとされている。

現在伊勢神宮の祭神である天照大御神は、古くは宮中に祀られていたが、この状態を畏怖した天皇の命で鎮座地を求めて適地を探し、垂仁天皇の時に最終的に伊勢の地に落ち着くことになったが、それまでに訪れ一時的に留まった遷座地は、各地に元伊勢の地として残り語り継がれることになった。



天岩戸神社

この神社もそうした元伊勢伝承地の旧跡の1つで、特に皇大神宮(伊勢神宮内宮)の元宮であるとの伝承から、元伊勢皇大神宮または元伊勢

内宮とも称されるが、この地が伊勢と違って貴重なのは、伊勢の宮が段々手厚く飾り祭られていったのに対し、原初の佇まいがそのままの状態であれ忘れ去られ残されてきたことにあるように思う。

高みに登って俯瞰すると、あれがウズメノミコトが舞った舞台、アソコが天の岩戸、タジカラオが引き開けた扉…と、思いを辿ることが出来るのである。

大江地域にはこの他にも元伊勢伝承を名乗る神社があり、「元伊勢三社」と呼ばれている。

伊勢の地に最後にとり澄まし顔で納まった姿ではない、古人が思い描いた通りの姿がそのままの形で残されているのが嬉しい所である。

(5)六道珍皇寺

京都、東山の裾野近くに六道の辻と言う交差点がある。

「六道」とは、仏教の教義でいう地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅(阿修羅)道・人道・天道の六種の冥界をいい、人は因果応報により死後、この六道を輪廻転生するという。

六道の分岐点は、この世とあの世の境を示す境界で、それが古来よりこの寺の境内辺りであるといわれ、冥界への入口と信じられてきた。

このような伝説が生まれたのは、この辺りが平安の昔は東の墓所であった

鳥辺野に至る道筋で、野辺の送りはこの辺りでなされたことにより、ここが「人の世の無常と儚さを感じさせる



場所」となったこと、小野篁が夜毎の冥府通いのため、珍皇寺の本堂裏庭にある井戸をその入口に使っていたことが原因になっているらしい。



小野篁の冥途通い井戸

なお小野篁は参議小野岑守の子、嵯峨天皇につかえた平安初期の官僚で、武芸に秀で、学者・詩人・歌人としても知られる。

気儘な性格で奇行が多く、遣唐副使にも任じられたが、大使の藤原常嗣と争って、嵯峨上皇の怒りにふれ隠岐に流罪されたこともある。

また、なぜか閻魔王宮の役人ともいわれ、昼は朝廷に出仕し、夜は閻魔庁に勤めていたという奇怪な伝説を持ち、こうした篁の冥官説は室町時代にはほぼ定着していたらしい。

今なお本堂背後の庭には、篁が冥土へ通った井戸があり、近年旧境内地からは冥土から帰るのに使った「黄泉がえりの井戸」も発見されたという。

境内には、閻魔大王と小野篁の像が安置されているお堂や、冥界まで聞こえるという鐘撞堂があり、撞くと外からは姿の見えない『迎え鐘』が、地の底から湧き出るように陰湿な冥土の音を足元から響かせてくる。

2. 日本人の心

以上のように「日本人の心」について何某かのヒントが得られないものかと手掛かりを求めてきたのであるが、矢張り「日本人の心」が何たるかを断定することは難しかった。

「日本人の美しい心」とか「親切心」等については外国人との接触が重くなるに従って話題に上ることも多くなったが、仮に噂の通りであったとしても、何故それが他に優れてそうなのか、という点がはっきりしないのである。

原初の日本人の心は、沖ノ島の遺跡を原点として見るならば、事が望み通りに叶うよう己が身を低うして只管神に願った時の純粋な心であったろうと思うし、それは大和の大神神社の三輪山に足を踏み入れた時に見た巨岩に祈る老婆の心も同様であったろうと思う。

そしてこの日本人の心情は、今に残る遺跡や古文書等から推量しても、情操的な性向も含めて固有の文化として日本人の中に沈潜同化して、連綿と受け継がれてきていることを違和感なく共感出来るのである。

原初から現在に至る迄には種々の障害や課題を経験してきた筈であるが、そこで求められた要求には単に古きが故に過去を排するのではなく、都度慎重に吟味が重ねられ価値あるものは受入れながら現在に至っていて、その様にして積み重ねられてきた年輪こそが今の日本人に残された貴重な財産になっているに違いない。

そしてその様な環境の中に常に存在していた「日本人の心」こそが、現在の価値観を存立させる根源になっているのであろうと想像する。

その為「日本人の心」と言うのは、この原初の昔から時々の思いを受け継ぎ、論語や道徳など後世に流入した諸規範は是々非々で受止めつつ日本人の心の核心部に連綿として存在し続けたこの **純粋で「たおやか」な心**こそがそれであると信じる次第である。

完